

近代の神社建築に関する一事例

——神田神社社殿再建経緯と『神田神社再建工事概要』翻刻を通して——

岸川 雅 範

はじめに

神田神社は、東京都千代田区に鎮座する通称・神田明神の名で知られる神社。御祭神は、大己貴命、少彦名命、平将門命の三柱の神々を奉斎している。天平二年（七三〇）創建の江戸東京で最も歴史ある神社の一つに数えられ、明治以降は、准勅祭社、東京府社に列格した。明治七年（一八七四）には、明治天皇が御親拝になった東京の中では数少ない神社の一つである。現社殿は大正十二年（一九二三）に起こった関東大震災で木造の社殿が焼失した後、昭和九年（一九三四）に再建されたもの。神社建築としては最初期にあたる鉄骨鉄筋コンクリート造で、さらに日本産漆による総漆塗が施されていることが主な特徴である。設計

監督は、明治神宮の造営、明治神宮宝物殿の設計に従事した大江新太郎と、早稲田大学大隈記念講堂や日比谷公会堂など鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄筋コンクリート造の建造物を多く設計した佐藤功一。設計顧問には明治神宮造営をはじめ多くの神社造営にたずさわった伊東忠太が選ばれた。平成十五年、国指定登録文化財（建造物）に指定されている。神田神社社殿は、建造物の密集する東京都心部の神社として容易に焼失・崩壊してしまわないように耐震耐火構造・材料が適用された。さらに昭和初期の日本建築界において、鉄骨鉄筋コンクリート造等で日本独自の建築様式を表現することが、良かれ悪しかれ注目されていた時代の中で再建された最初期の神社建築であった。

本稿は、神田神社の現社殿の再建経緯とそれをまとめた

『神田神社再建工事概要』の翻刻を通して、近代における都市の神社建築に関する一事例の提示を目的とする。筆者は建築学専攻ではなく全くの分野外であるが、神田神社社殿の経緯・資料を提示することにより今後の神社建築研究の一助となればと思う。

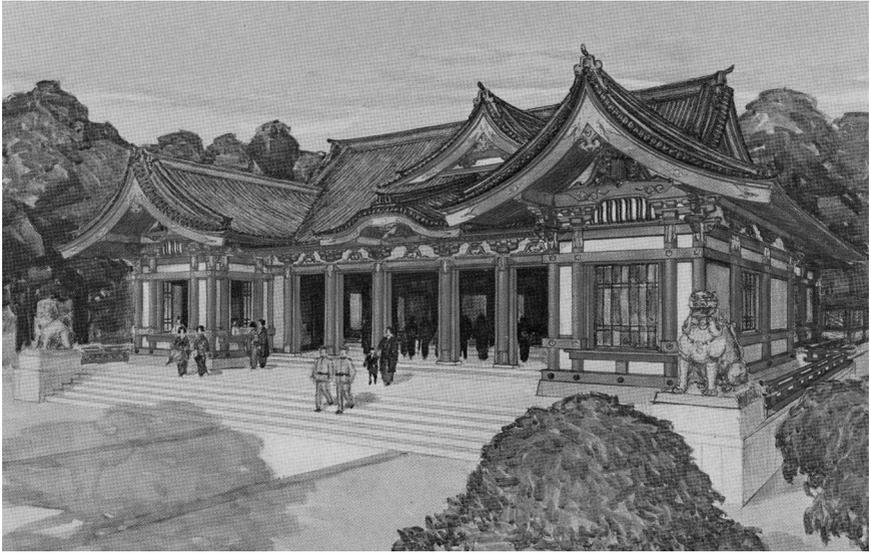
一、関東大震災による社殿の崩壊と復興計画

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、東京・神奈川を中心に未曾有の関東大震災が起こった。相模湾北西部を震源としたマグニチュード七・九の大地震と直後の大火災により、死者・行方不明者が約十万人に及び、約四十万世帯が深刻な被害に見まわれた。東京府内ではこの震災により、神田、日本橋、京橋、下谷、浅草、本郷、芝の地域に大きな被害が及び、神社では府社三社、郷社六社など、計八十六社の神社が炎上・罹災した。特に神田神社が鎮座する神田区の地域は元祖下町で、地盤が弱く木造家屋が密集する地域であったため、家屋の多くは倒壊し直後の大火により一面炎に包まれ、ほとんど壊滅的な状況に陥った。神田神社の境内も、猿楽町より飛び火した火災により、ほとんどの建造物・記念碑が崩壊してしまった。かろうじて社殿に鎮座します御神霊は本郷区龍岡町の岩崎久弥邸内に遷座しことなきを得たが、天明二年（一七八二）に江戸幕

府により建立された江戸後期を代表する社殿は跡形もなく焼失してしまった。⁽³⁾

東京の諸神社神職により構成された東京府神職会ではこうした由々しき事態に臨み、同年九月二十三日に震災救済策を講じるため神社神職協議会を開き、社殿を焼失した神社のため仮殿の建築用材を配給することなどの応急対策を話し合った。その後、十月十五日付で臨時震災事務局芝浦出張所より炎上神社八十六社へ仮殿用の建築用材が下付され、各神社において仮殿の建立が行われた。神田神社ではまず大正十二年九月二十五日に氏子総代と神職で再興のための協議が行われ、下付された建築用材で仮殿を建立した。⁽⁴⁾翌十三年四月七日に東京府神職会により罹災神社神職協議会が開かれ、神社本建築について建築費の低利資金借入れのことが協議され、府社三社をはじめ郷社二十四社の神職たちが四月十四日に「低利貸下金請願書」を内務大臣水野鍊太郎・東京府知事宇佐美勝夫に提出した。⁽⁵⁾この申請書が受理され、神田神社においても政府より建築費として低利資金が下付された。

そして大正十五年十月、菊池長四郎が中心となり氏子総代とともに神田神社復興会を結成した。この復興会はその後昭和三年（一九二八）に拡大され、総裁・会長が置かれることとなり、総裁に明治神宮造営局評議員、明治神宮奉



角南隆設計による神田神社社殿配景図
（『神田神社新築設計図』大正十五年八月、神田神社所蔵）

賛会副会長、同理事長などを歴任し明治神宮内苑・外苑の造営に従事した阪谷芳郎⁶、会長に明治神宮奉賛会評議員をつとめた星野錫⁷が就任、その他氏子総代たちが建築委員に名を連ねた。

二、社殿再建にいたる経緯

神田神社復興会は結成とともに、大正十五年十月に神職・氏子総代の連名で氏子各位に社殿再建のために寄付募集の書状を出した。書状には「神田神社建築予算書」「神田神社復興会規程」とともに角南隆の設計による「神田神社新築設計図」が添えられた。

角南隆は当時、内務省神社局技師を務め、大正後期から昭和戦前の神社建築行政をリードした人物として多大な影響を持った人物であった。かつては明治神宮造営局技師を務め、戦後の明治神宮を設計した人物としても知られている。その角南が提示した神田神社の設計は、外廓を鉄骨鉄筋コンクリート造で権現造に、内部に檜木材を使用するというものであった。⁸

実際の設計図及び配景図を見ると詳細な指示がないため詳細は不明であるが、角南及び角南を中心とした昭和戦前期の内務省神社局の営繕による護国神社や海外神社などの社殿配置の特徴に類する要素が随所に見られる。それは主

に以下の三点にまとめることができる。

①本殿・幣殿（祝詞殿）・拝殿を内部で接続し内部空間として一体化した形式。

②拝殿の両脇に翼舎を設け拝殿と幣殿とをつなぐ廻廊を設置していること。

③拝殿を二分し座礼と立礼で同時に祭祀と参拝ができる設計であること。

それは角南によると主に次のような神社建築観があった。ひとつは、祭祀奉仕の便である。内部空間の一体化により、神職の神事奉仕が途切れることなくスムーズに行えるという。もう一つは、参拝者への配慮である。参拝者・参列者が御祭神のまします本殿の一部を拝することができ、それにより神の存在をより身近に感じられるという⁽⁹⁾。また、神田神社では御祭神・大己貴命の御神徳から神前結婚式が非常に多かったため、社殿と社務所（参集所）との間に地下道を設け花嫁・花婿の動線を確認することも考えていた⁽¹⁰⁾。

この角南の設計した社殿は昭和二年（一九二七）五月より起工し約二年間で竣工の予定であった。しかし、どういった経緯があったのか不明であるが結局採用されず廃案となった。

その後改めて設計監督に鉄骨鉄筋コンクリート造により明治神宮宝物殿を設計した大江新太郎⁽¹¹⁾と、早稲田大学大隈

記念講堂をはじめ多くの鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄筋コンクリート造の建造物を手がけた佐藤功一⁽¹²⁾、設計顧問に大江・佐藤に神田神社の設計を命じた伊東忠太が就任し社殿の再建がはじまった。鉄骨鉄筋コンクリート構造母体工事は、鉄筋コンクリート造で木造建築の形態を忠実に再現した最初期の和風コンクリート造・真宗大谷派函館別院の工事を担当した木田保造により設立された木田組が行った。

そして角南の提示した案をさらに進めるような方向で以下の特徴をもつ社殿が設計され造営された。

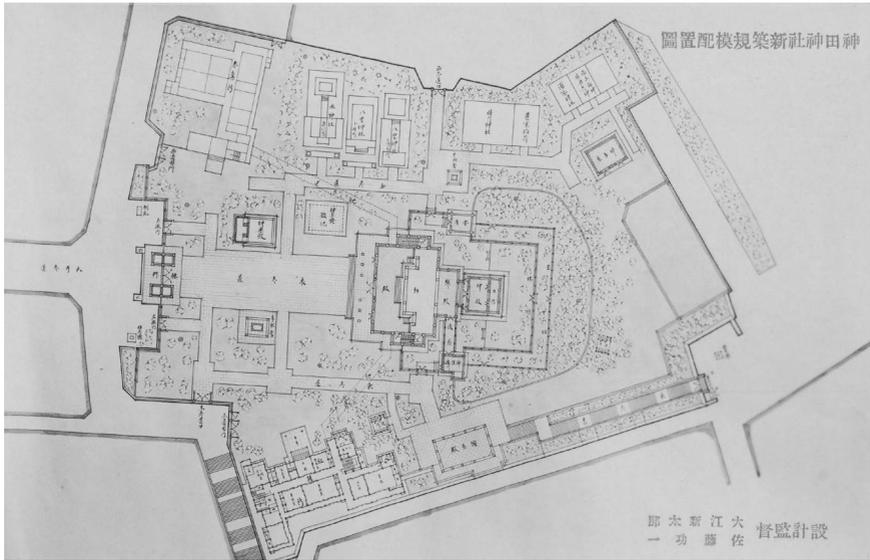
①鉄骨鉄筋コンクリート造に防火性のモルタルなどを塗装した耐火耐震構造であること。

②全ての建造物に日本産の漆による塗装が施されていること。

③祭祀奉仕の便を考え、社殿（本殿―幣殿―拝殿）が内部で一体化され、さらに渡廊下を介して幣殿と神饌所がつながれていること。

この他にも、拝殿を畳敷と石敷（土間）に二分し座礼と立礼に対応できるようにしたり、結婚式のために社殿と社務所・参集所を結ぶ地下道が設けられるなど、当時の神田神社とそれを取り巻く社会状況に対応した設計と造営が行われた⁽¹³⁾。

昭和四年十一月十二日に地鎮祭、時を置いて昭和六年二



神田神社新築規模配景図（昭和九年、神田神社所蔵）

月二十七日に起工祭が斎行され、構造母体工事から始まり各工事が行われていった。同年六月三日の立柱祭、十月五日の上棟祭を経て、昭和九年五月に御神宝及び社殿内装備、煉塀工事終了により全工程が完了。同月七日午後八時より、氏子総代をはじめ神田神社復興会や技術関係者が参列する中、本殿への遷座祭が執り行われた。

ちなみに社殿以外の建造物は参集所や鳥居など一部の建造物は再建されたが、日本が国連を脱退し第二次世界大戦へと突入していくという激動の時代であったため、随神門など復興が計画されていた主要建造物は再建されず、それらの復興や境内整備は戦後に委ねられた。

三、再建された社殿の二つの特徴

神田神社社殿の特徴の一つは、当時の神社建築としては最初の鉄骨鉄筋コンクリート造で耐火耐震構造を持つことである。佐野利器らの研究により明治後期より注目され始めたその建築材料・構造は、関東大震災を契機に飛躍的に研究され多くの建造物に適用されるようになった。特に東京市という諸建造物がひしめく地域において、耐火耐震構造の建造物を建立することが当然視された時代である。そうした時代背景の中、鉄骨鉄筋コンクリート造を神社の建築材料・構造に適用することを、特に強く主張したのは



昭和九年再建の社殿外観（神田神社所蔵）

角南であり大江であった。

しかし当時の意見は神社建築はやはり古式に則り木造を厳守すべきということが大勢を占めており、例えば伊東忠太は寺院建築については公会堂的な意味合いもあるので木造以外の建築材料を使用し新様式を適用しても良いが、神社建築は日本独自の建築様式でなければならず古式を遵守すべきとした。たとえ「東京市内人家稠密の巷に介在する神社に於いても少くともその社殿は木造の古式を保つことを原則とすべきである。」⁽¹⁵⁾とし、鉄筋コンクリートを使用することにより日本独自の建築様式が破壊され神社の生命が失われてしまうということを危惧している。さらに「合理主義」と呼ばれた建築家たちにより、鉄骨鉄筋コンクリート造により木造建築の姿を再現しようとすることは構造上、材料の性質上において不適當であり、コンクリートで木造建築の凹凸を施すことなど悪フザケだなどという辛辣な批判が多く出された時期でもあった。⁽¹⁶⁾

そうした批判を押し切った形で、大江はこれからの神社建築、特に都市のそれのあるべき姿を鉄骨鉄筋コンクリート造という耐火耐震構造・材料に見たのである。それは関東大震災を経て「神社は火事に遇つて容易に焼け失せるものであつては困る」ことを痛感したからであり、

これからの神社建築は―特に市街地に於けるものが真つ

先に——第一、其所要建物の数も増えやうし、第二、構築材料の選択も変つて来て、耐火材料を使用するか、或は可燃質材料を使用しても、之を耐火的に処理し、且つ構造することにならうし、第三、其結果は当然之が建築容貌にも、幾分若しくは大きな部分の変化を来すであらう、而して、此変化は古来の建築様式変遷の慣例に従つて、一旦に変化するものではなく、或期間の過渡期を経過して漸次變つて往くものであると。

という、大江の抱いていた、神社建築も各時代にあった建築として変化していくべきという建築史観があつたからである。

神田神社社殿は、鉄骨鉄筋コンクリート造という当時の新技術で造営された最初期の神社建築で、当時の木造遵守という古式に反する建築であつたが、その一方、日本の古式を意識し木造の姿に限りなく近づけようとする努力も同時ににはらわれた。つまり神社建築という日本独自の建築様式への配慮が各所に見られるのである。

その最たるものがこの社殿の二つ目の特徴である総漆塗である。コンクリートに日本産生漆を十七回にわたり塗装したのであるが、当時としてはおそらく日本初の試みであつたと推測される。これは大江新太郎が研究を重ねて行つたことであつたといふ。⁽¹⁸⁾日本建築に使用された伝統的

材料・漆を塗装することで、少しでも日本独自の建築様式である神社建築の味わいを表現しようとしたのである。

小屋組を鉄骨にして荷重を軽減させたり、柱間を少し狭めるなどして木造の比例に近づけ、木造のスレンダーさを出そうという工夫なども随所で行つてゐる。⁽¹⁹⁾

また社殿の外観を天明二年建立の木造社殿に近づけ総面積も江戸期のものとはほぼ同じにし、氏子をはじめ参拝者に違和感を与えないようデザインしていることも見逃せない。当初の角南案の翼舎が両脇に出っ張つた社殿は景観的に違和感を感じさせるデザインであつたが、大江はそれを江戸時代のものに近づけようとした。

結びにかえて

神田神社社殿は、鉄骨鉄筋コンクリート造という新技術と、総漆塗に代表される日本独自の建築様式としての伝統との融合を図つた建築であつた。関東大震災を経て都市の神社は耐震耐火構造が適用されるべきという要求と、古式を遵守すべきという不変性の要求とを上手くつなぎ合せ、これからの神社建築の在り方の一つを作り出し、以降の神社建築に影響を与えた画期的建築であつたことは注目すべきであろう。さらに、神田神社が東京府社であつたにもかかわらず、明治神宮をはじめとする官国幣社に主に携わつ

た角南隆、大江新太郎、伊東忠太たちが再建工事に名を連ねていたことも見逃せない。

そしてもう一つ注目すべきは、佐藤功一の関与である。佐藤は、神社建築に関しては後にも先にもこの神田神社社殿のみであったが、鉄骨鉄筋コンクリート造・鉄筋コンクリート造による和風コンクリート造の建築に「新日本式のきらめき」を見た人物であった。日本建築界の中では大江や伊東忠太、角南隆らを凌ぐほどの名建築家として知られた佐藤がいかなる経緯により、この神田神社の社殿再建に関わることになったのか。今後の課題としたい。

最後にこの社殿の再建概要を最もシンプルかつ総合的にまとめた『神田神社再建工事概要』の翻刻を付し、今後の近代神社建築の資料に供したい。⁽²⁰⁾

注

- (1) 宮内庁『明治天皇紀』第三、吉川弘文館、昭和四十四年。
- (2) 東京市『東京震災録』別輯（東京市役所、昭和二年）、千代田区役所『千代田区史』中巻（千代田区役所、昭和三十一年）、千代田区『新編 千代田区史』通史編（千代田区、平成十年）等参照。
- (3) 東京市『東京震災録』別輯。
- (4) 『神田明神は本日再考の相談』（『都新聞』大正十二年九月二十五日）、「炎上した神田明神 愈々本殿再建」（『都新

聞』大正十二年十月八日）。その後さらに昭和三年、新しく仮殿が建立された（『神田神社仮殿新築其他工事設計書』昭和三年十月、神田神社所蔵）。

(5) 関東大震災に対する東京府の神社界の動向については、『東京府神職会公報』一三七号（大正十三年五月）、東京都神社庁『東京都神社庁史 前編』（東京都神社庁、昭和五十六年）を参照した。

(6) 他に、大蔵大臣、東京市長、貴族院議員、神社奉祀調査会委員、明治神宮外苑管理評議員、明治神宮体育会長、東京商工会議所顧問などを歴任。社団法人尚友俱樂部・櫻井良樹『阪谷芳郎東京市長日記』（社団法人尚友俱樂部、平成十二年）を参照。

(7) 他に、東京商工会議所特別議員、同顧問、衆議院議員、東京市会議員、浅草寺顧問などを歴任。星野錫翁感謝会『星野錫翁伝』（星野錫翁感謝会、昭和十年）を参照。

(8) 『鉄骨鉄筋の神田明神』（『神社協会雑誌』二十五年九月、大正十五年九月）。

(9) 角南隆及び内務省神社局の神社営繕については、藤岡洋保『内務省神社局・神祇院時代の神社建築』（神道文化会『近代の神社景観―神社局時代に撮影された神社―』神道文化会、平成九年）、青井哲人『角南隆』（『建築文化』六三九、平成十一年十二月）などを参照。

(10) 『神田明神の設計』（『神社協会雑誌』二十五年四号、大正十五年四月）。

(11) 大江新太郎については、伊藤三千雄・前野堯『日本の建築（明治大正昭和）8 様式美の挽歌』（三省堂、昭和五十七年）、『建築雑誌』四十九輯六〇三号（昭和十年九月）などを参照。

(12) 佐藤功一については、田辺泰・猪野勇一『佐藤功一博士』(彰国社、昭和二十八年)、『建築雑誌』五十五輯六七八号、昭和十六年九月)などを参照。

(13) 『神田神社再建工事概要』神田神社所蔵。大江新太郎「神田神社」『建築雑誌』第四十八輯五八九号、昭和九年九月。

(14) 『本殿遷座渡御祭両儀ノ概要』神田神社社務所、昭和九年五月、神田神社所蔵。

(15) 伊東忠太「復興の社寺建築」時事新報社「新しい東京と建築の話」時事新報社、大正十三年、二五二頁。

(16) 藤岡洋保「昭和初期の日本の建築界における『日本的なもの』」(『日本建築学会計画系論文集』第四一二号、平成三年六月)、大川三雄「新日本式のきらめき」(初田亨・大川三雄・藤谷陽悦『近代和風を採る』上巻、エクスマレッジ、平成十三年)などを参照。

(17) 大江新太郎「社寺復興の理想と建築」時事新報社『新しい東京と建築の話』時事新報社、大正十三年。

(18) 森口三郎「故大江新太郎先生を追憶す」『建築雑誌』第四十九輯六〇三号、昭和十年九月。

(19) 藤岡洋保「近代の神社建築の意匠」『神社新報』平成八年一月一日。

(20) 神田神社の再建工事に関しては、『建築雑誌』第四十八輯五八九号や『建築世界』第二十八巻第八号(昭和九年八月)にも記されているが、内部の装飾や神田神社復興会のことなどは記されておらず、『神田神社再建工事概要』のほうがそうした事項をより詳しく記している。

(神田神社権禰宜)

翻刻『神田神社再建工事概要』

凡例

一、『神田神社再建工事概要』の原本は、東京・神田神社所蔵で、謄写版印刷、縦十八センチ、横十三センチの小冊子。二十四ページ。再建工事概要から神田神社関係者まで八項目に渡って記録されている。

一、翻字は通行の字体を使用した。

一、適宜、改行を行い、句読点を施した。

一、「工程表」は本来は「使用材料概数」と「工事起工及竣工」の間に掲載されているが、便宜上、末尾に掲載した。

神田神社再建工事概要

一、所在地 神田区宮本町十八番地

一、敷地 神社境域約四千坪

一、建築坪

一、惣 建 坪 柱真々ニテ 百五十坪八合八勺

外二地下室及地下道 壁内法ニテ 四十九坪三合五勺

一、雨 落 坪 三百七十四坪四合六勺 (玉垣ヲ含ム)

一、屋根葺坪 六百十四坪三夕(ク) (柱真々坪ノ四)

一、神 殿

倍強(二当ル)

桁行 二十四尺 梁間 二十二尺五寸
大前向拝 十八尺 八尺

建坪 十九坪

床高 建築地盤ヨリ 九尺八寸

天井高 床上 十五尺三寸

軒出 柱真ヨリ 九尺

大前向拝 七尺五寸

軒高 建築地盤ヨリ 二十六尺六寸

大前向拝 二十一尺三寸

床高 九尺八寸

棟高 四十四尺六寸

鉄骨鉄筋コンクリート造。三間三面。亀腹石上丸柱建。出組。

四壁大羽目、上下長押付。四方椽勾欄取廻シ脚元差肘木腰組。

屋根入母屋造、銅板瓦本葺。軒ニタ軒半繁種。間内内外陣檜

素木造。床ハ外陣疊敷、内陣拭板張。天井ハ内外陣共折上格

天井。外陣菅原窓鉄製部戸、全正面御扉口鉄扉。周圍壁板檜

落シ嵌。内陣御扉口ニテ所板唐戸。下陣ノ正面前方ハ大床階

段構へ。登勾欄、男柱擬宝珠付。左右窓鉄製硝子障子。全椽

へノ出入口ニテ所鉄製板唐戸。天井化粧裏。大壁及天井裏板

ハ漆箔押へ。内外陣ノ檜素木部分ヲ除ク外建物内外弁柄漆塗。

要所鍔金具打並ニ漆箔押へ。

幣二殿 桁行 十五尺 梁間 三十三尺

建坪 十三尺七合五勺

床高 六尺一寸 建築地盤ヨリ

天井高 十五尺八寸

軒出 柱真ヨリ 八尺八寸

棟高 建築地盤ヨリ 三十二尺三寸

鉄骨鉄筋コンクリート造。二間三面。石土壇上丸柱建三ツ斗

組、内外上下長押付。屋根兩流銅板瓦本葺、軒ニタ軒半繁種。

内部床、コンクリート床版ノ上ニ杉板張疊敷。天井ハ中ノ間

折上格天井裏板極彩色、兩脇平格天井。神饌所渡廊下へノ入

口ハ鉄製棧唐戸花狭間極彩色。窓襦子緑青平彩色。其他建物

内外弁柄漆塗。要所鍔金具打、漆箔押へ。

一、拝 殿

桁行 六十三尺 梁間 四十五尺

向拝 四十八尺 十尺

兩翼 二十二尺五寸 七尺五寸

建坪計 百一坪四合六勺

床高 建築地盤ヨリ 他ニ地下室二十八坪七合五勺

石敷ノ分二十尺二寸五分

天井高 石敷床三尺一寸 疊敷床六尺一寸

軒出 柱真ヨリ 十一尺

向拝 九尺四寸

兩翼 七尺三寸

全雙羽 柱真ヨリ破風外面マデ 八尺三寸

棟高 建築地盤ヨリ 四十八尺一寸

向拝 三十二尺三寸

兩翼 二十八尺六寸

鉄骨鉄筋コンクリート造。石土壇勾欄構へ。七間六面丸柱

建、三ツ斗組、内外上下長押付。屋根入母屋造、向拝軒唐破風、

正面千鳥破風、妻飾大虹梁太瓶束。入母屋妻飾ハ二重虹梁太瓶束。軒ニ夕軒半繁種、銅板瓦本葺。正面三ヶ所出入口鉄製唐戸。左右襦子窓鉄棧硝子障子。内部床、一部四盤石敷、一部畳敷。正面三ヶ所昇り階段勾欄構へ。天井、石敷ノ分ハ大虹梁平格天井、畳敷ノ分ハ折上格天井極彩色。窓襦子ハ緑青平彩色。其他建物内外弁柄漆塗、要所銑金具打漆箔押へ。

兩翼階段室。一間三面。屋根切妻造、銅板瓦本葺。軒一ト軒半繁種。床モルタル塗目地切。階段右翼ノ分ハ人造石、左翼ノ分ハ檜素木造。其他建物内外弁柄漆塗。要所銑金具打漆箔押へ。

地下室壁及天井ハ防湿性アスベストスモルタイト塗。天井平格天井。出入口木製唐戸、花狭間極彩色。窓襦子緑青平彩色。

一、神饌所

桁行 十五尺 梁間 十二尺

建坪 五坪八合三勺三才

床高 建築地盤ヨリ 六尺一寸

天井高 床 上 十尺九寸五分

軒出 柱真ヨリ 六尺

下家 四尺五寸

軒高 建築地盤ヨリ 十六尺四寸

下家 十二尺五寸

棟高 二十七尺六寸

鉄骨鉄筋コンクリート造。二間二面。石土壇上丸柱建。大斗舟肘木組。大羽目、上下長押付。屋根入母屋造、下家付、銅板瓦本葺。軒ニ夕軒半繁種。内部床コンクリート床版ノ上ニ檜素木板張。一部土間。周囲壁白漆喰塗。天井檜素木平格天井。入口鉄製唐戸、花狭間極彩色。建物外部弁柄漆塗。要所銑金

具打、漆箔押へ。

一、渡廊下

桁行 二十八尺 梁間 七尺五寸

建坪 五坪三合三勺

床高 建築地盤ヨリ 六尺一寸

天井高 床 上 十尺九寸五分

軒出 柱真ヨリ 四尺

軒高 建築地盤ヨリ 十三尺一寸

棟高 十八尺一寸

鉄骨鉄筋コンクリート造。東右上角柱建。屋根両流、銅板瓦本葺。軒一ト軒疎種。内部床コンクリート床版ノ上ニ檜素木板張。天井化粧裏。神饌所並ニ幣殿ヘノ出入口扉ハ鉄製唐戸、花狭間極彩色。窓襦子緑青平彩色。其他建物内外弁柄漆塗、要所銑金具、打漆箔押へ。

一、神庫

桁行 十五尺 梁間 十二尺

建坪 五坪

床高 建築地盤ヨリ 五尺七寸

天井高 床 上 十尺

軒出 柱真ヨリ 六尺

軒高 建築地盤ヨリ 十六尺四寸

棟高 二十七尺六寸

鉄骨鉄筋コンクリート造。二間二面。校倉大床建。大斗舟肘木組。屋根入母屋造、銅板瓦本葺、軒ニ夕軒、半繁種。内部ハ床及周囲大羽目並ニ棹椽天井共総テ檜素木板張。正面入口ハ鉄製唐戸、檜製硝子戸及網戸ノ三重締り。建物ノ外部弁柄漆塗、要所銑金具打、漆箔押へ。

一、前方玉垣

延長

軒出

軒高

棟高

柱真ヨリ

地盤ヨリ

〃

十八間

三尺五寸

十一尺七寸

十五尺

十尺

門柱高
塀重門風、門柱ハ鉄筋コンクリート造、擬石塗。擬石塗。扉ハ台檜ニテ作り、青鎖襦子腰襷羽目ナリ。

工事仕様概要

鉄骨鉄筋コンクリート造。石土壇上角柱建。表裏上下長押付。屋根両流銅板瓦本葺。軒一ト軒疎種。出入口扉ハ鉄製唐戸、花狭間極彩色。窓襦子緑青平彩色。建物総体弁柄漆塗。要所鍍金具打、漆箔押へ。

一、地下道

參集所ヨリ拝殿ニ至ル延長

床面積

副員

床高

天井高

二十三間

二十六坪三合五勺

六尺一寸

九尺下り

二尺五寸下り

鉄筋コンクリート造。床モルタル塗四盤目地切。壁面杉板張。天井防湿性アスベストスモルタイト塗仕上。要所天窗及換気口取設ク。

一、外廓煉塀

延長

棟高

壁厚

五十二間

九尺三寸

一尺八寸

煉塀風慰斗瓦張付ケ、落子並ニ鉢卷ハ白漆喰塗。屋根棧瓦葺トシ、外側道路側溝ニ沿ヒテ切石ノ犬走リヲ付ス。

一、東西通用門

内法

柱真ニテ

十二尺

一、基礎工事。壺堀及布堀ハ建築地盤下深サ四尺。堀底大玉砂利厚サ三寸。均シコンクリート厚サ二寸五分ノ上ニ繫梁鉄筋ヲ配ス。

一、軸部及屋根工事。鉄骨鉄筋コンクリートノ柱ハモルタル上塗トモ太サ一尺二寸乃至一尺八寸、壁厚ハ四寸乃至八寸。屋根葺地ハ鋼製ラスコンクリート打ちノ上ニアスベストスモルタイトヲ塗ル。

一、石工事。稲田産花崗岩使用。神殿龜腹、並ニ拝殿ノ土間床四盤敷等ハ三辺小叩キ仕上ケ、其他ノ石土壇及參道等ハビシヤン打仕上ケ。

一、木工事。神殿ノ内部並ニ幣殿、拝殿、神饌所、神庫等ノ各天井、階段、勾欄等ハ木曾産檜小節材使用。定備大工ヲ以テ仕上ゲタリ。

一、建具工事。総テ鋼鉄七厘厚ノ磨板使用。附属金物ハ鉋金鑄物。硝子ハ二分厚磨板ノ両面艶消シ。

一、左官工事。モルタルハ浅野セメント及玉川砂使用、調合ハ一、三、トシ、絵様彫刻マデ一切ヲ塗仕上ケ。

一、漆塗工事。日本産生漆ヲ用ヒ、下地拵ヘヨリ弁柄塗仕上マデノ遍敷、コンクリート肌ハ七回、木部ハ二十五回。

一、彩色。金箔ハ使途ニ応ジテ純金及色吉使用。絵具ハ群青、白群、緑青、白緑ノ岩物、並ニ朱、朱土、黄土、胡粉等ヲ使

用ス。

一、銅屋根工事。銅板ハ住友及古河製銅板ノ定尺モノ(四尺、一尺二寸)ヲ用ユ。目付ハ巴瓦、唐草瓦、鬼板等ハ二十八オンス付、平瓦ハ九オンス付、谷等ノ捨張りハ八オンス付トス。下葺ハアスフェルト二号品ヲ用ユ。銅板瓦ハ葺足三寸、二枚重ネニ葺上げ、銅鋸ハ根ノ太サ径一分、頭径二分ノモノヲ使用ス。

一、銅板張工事。拝殿前石土壇ノ勾欄ハ、架木ハ径四寸厚一部五厘ノ銅管ニコンクリートヲ注入シタルモノ、男柱平桁、地覆及束等ハ下地鉄筋コンクリート造ノモノヲ五厘厚銅板ニテ包装セリ。軒樋ハ五厘厚銅板ニテ造リ、社殿内外扉口ノ蹴放シハ凡テ五厘厚銅板ヲ以テ被覆ス。

一、鍍金具工事。鍍金具ハ凡テ五厘厚ニ透シ彫ヲ施シタルモノニシテ、屋根廻リハ純金箔二枚掛ノ漆箔押、其他ハ全部水銀三辺鍍金トス。

一、照明器具。器具一式図案ニ依リ直営製作ス。

一、畳工事。神殿外陣ハ床^{ツツ}十三通り足締、表備後四配モノ、平絹緋縁。幣殿ハ床^{ツツ}前同断縁麻大紋。拝殿同断中紋縁。一、社殿内外装備。

内陣……御幌ハ、表白固地綾豎長文ニシテ、裏白平絹、野筋ハ紫綾蝶鳥文黄白摺ナリ。釣棹、檜素木ノ小丸ニシテ、釣紐ハ白細組、釣金具ハ純金ニ遍鍍金ナリ。御簾ハ、緑赤地大和錦、紐啄木打、房白赤黒ナリ。御壁代ハ、表裏共白平絹ニシテ袷縫ナリ。

外陣……御幌ハ、表白平絹朽木文柴摺ニシテ、裏白平絹、野筋ハ赤黒平絹、蝶鳥文胡粉ナリ。御簾ハ緑大和錦、紐房共内陣ト全様ナリ。

本殿大前向拝廻リ……御簾ハ、縁萌黄平絹紋黒、紐赤組緒、房白赤黒ナリ。

幣殿……正面帳ハ、表裏共白平絹ニシテ朽木文柴摺、野筋ハ赤黒平絹蝶鳥文胡粉摺ナリ。左右羽目壁代ハ、前帳ト同様、但シ裏ハ無文ナリ。御簾ハ、本殿大前向拝廻リノモノト同様。

拝殿畳床……幣殿堺帳ハ、幣殿正面帳ト同様、但シ朽木文ハ茶摺ナリ。土間堺帳ハ、幣殿堺帳ト同ジ。簾ハ、縁纏平絹紋黒ニシテ、紐赤組緒、房白赤黒ナリ。

全土間床……幌ハ、幣殿堺帳ト同様。簾ハ畳床ト同様。全向拝……帽額ハ、垂三尺、麻太織ニシテ瑞鳥瑞花文、型置及色糸刺ナリ。

渡廊下……簾ハ拝殿ト同様。

神饌所……簾ハ、拝殿ト同様。

宝庫………幌ハ、表裏共白平絹無文ニシテ袷縫ナリ。

玉垣門………帳ハ、幣殿正面帳ト同様。

一、御神座。直弧ノ地舖ヲ布キ、檜作り鼠色塗ニ鍍金具打チタル地覆並ニ浜床ヲ置キ、厚畳ノ上ニ中舖、八重畳、龍鬚ヲ重ネテ御宮殿ヲ奉安ス。上部天井ニハ鼠色塗骨ニ紫綾瑞雲文ノ錦蓋並ニ固地綾小葵文ノ御帷ヲ釣垂シ、御前ニ、金銀箔押、群緑ノ生ケ彩色シタル木彫呵呷ノ狗犬ヲ置ク。御神座両側ニハ檜作り鼠色塗骨ニ、鳥ノ子軟錦縁ノ貼付ヲナシ、大和絵風四季草花極彩色シタル御衝立ヲ装備ス。

一、御神宝

鏡………純銀鑄物ノ八菱鏡ニシテ、径八寸許。表面ハ白金鍍金、裏面ハ瑞花瑞鳥文薄肉彫、菊座乳鈕、紫固織綾平絹。袋ハ表白浮線綾裏白平絹。筥ハ高七寸許香狭間台檜作鼠

色絵様縁蒔絵覆輪取。筥ノ内貼黄赤七宝文綾。要所銑金具ヲ鏤ム。飾台ハ巾一尺六寸長三尺高一尺三寸許ノ檜作、朱漆塗十脚卓、要所銑金具ヲ打ツ。

靱……長二尺二寸許ノ紫檀作り壺瓶ニシテ胴ニ帯金及丸緒座アリ、胴表裏ニ生地蒔絵巴文ヲ散シ、要所純銀製金渡金銑金具ヲ鏤ム。内貼ハ赤地錦ナリ。矢ハ征矢十七筋、鎗矢一筋、細篋黒漆塗、雪白羽、箬水精、簇金銅、鎗矢、幕目ハ黄楊ノ挽物石灰摺ナリ。被裂ハ白平絹ノ単。筥ハ巾一尺長三尺六寸許高一尺三寸檜作り香狭間台、総体鼠色塗ニシテ要所ニ蒔絵覆輪ヲ取り銑金具ヲ鏤ム。内貼ハ黄赤七宝文綾ナリ。

弓……長七尺五寸許梓ノ丸木弓ニシテ総体沃懸地。本末両弭、純銀製金渡金、弭及矢摺ニ紫細組緒ヲ巻キ、附ハ赤地錦ナリ。弓袋ハ長一丈、表蘇芳固地綾三重菱文、裏紅平絹、菊綴仕立トス。飾台ハ靱共用ニシテ、巾二尺三寸長四尺高一尺三寸許、檜作朱漆塗十四脚卓、要所銑金具打チナリ。

使用材料概数

一、コンクリート	二百三十五立坪
一、鉄骨	二百五十噸
一、鉄筋	百五十噸
一、石	五千切
一、木	六千石
	二百四十石
	二万四千五百枚

工事施工担当者

一、漆 塗
一、彩 色
一、銑金 具

工事起工及竣工

昭和四年十一月 十二日
昭和六年 二月二十七日
全 年 六月 三日
全 年 十月 五日
昭和九年 五月 七日

技術関係者

顧問 工博 伊東忠太
設計監督 工博 大江新太郎
補助 工博 佐藤功一

現場監督 工博 伊藤義次
補助(昭和七年十月迄) 工博 森口三郎
工博 奥本五郎
工博 佐藤幸作
工博 望月和作

八万尺坪
五百尺坪
三千五百尺坪

地鎮祭
起工祭
立柱祭
上棟祭
遷座祭

神田神社関係者

一、内陣御神座前狗犬式対 自作寄進	東京 西村雅之	神田神社々司 全 監事		平田盛胤
一、鉄骨鉄筋コンクリート 構造母体工事	東京 木田組	神田神社復興会	総裁	阪谷芳郎
一、石工事	稲田中野慶吉	副会長	男爵	星野錫
一、左官工事	東京 福島勇藏	理事長・建築委員長		梅岡正吉
一、木曾檜材供給	名古屋 竹内廣吉	理事・建築副委員長		初山半三郎
一、杉材供給	東京 大石連治	理事・氏子総代建築委員		稲茂登三郎
一、木工事	新潟 小林平治郎			大内重兵衛
一、漆塗及彩色工事	日光 小西重太郎			藤井得三郎
一、鍔金具工事(御本殿)	東京 村田喜三郎			河合佐兵衛
一、銅屋根葺、銅張及鍔金具工事	日光 小島寅吉			山本徳次郎
一、屋内電燈線工事	東京 小島寅吉			淡島嘉兵衛
一、照明器具製作、 塗師 鋳師	新潟 小林平治郎			北原常次郎
一、鋼製建具工事	日光 小島寅吉			新間五兵衛
一、畳工事	日本鋼製建具株式会社			清水廣吉
一、御神宝及社殿内外装備	東京 西川甚五郎			青木栄次郎
一、煉塀工事(東側)	東京 増田英治			吉村吉兵衛
一、同(西側)	東京 社寺工務所			上野兵松
一、鳶仕事	東京 木村道章			更正社謄写印刷

